

動物愛護ふれあいフェスティバルinいわき

動物愛護週間の一環として、9月24日にフラワーセンターで「動物愛護ふれあいフェスティバル」開催。  
会場には、犬や猫と触れ合うコーナーや乗馬体験コーナーのほか、動物愛護絵画コンクール受賞作品の展示などが設けられ、来場した皆さんは、さまざまな動物との触れ合いを楽しみました。



10月8日に小名浜公民館で、市産木材PRイベント「WOODY I WAKI 2023」開催。  
木工工作、ビッグジェンガなどの体験コーナーや林業・木材産業関係者の木製品などの展示コーナーがあり、多くの家族連れが訪れていました。また、「カーボンニュートラルの実現に向けた森林と企業と行政のパートナーシップについて」をテーマにしたパネルディスカッションが行われ、木材や森林などへの理解を深めました。



木工工作コーナーにて椅子作り体験



ビッグジェンガの体験

WOODY I WAKI 2023

10月1日に四倉海岸で、風のデザインや美しさ、飛行能力、技術を競い合う「第25回いわき凧揚げ大会」開催。  
1996年のスタート以来、四倉町の秋の風物詩として知られていきましたが、参加団体メンバーの高齢化などを理由に、今回が最後の開催となりました。小雨が降る中でしたが、市内外から16団体が参加し、色とりどりの凧を大空に揚げ、腕前を競い合いました。



四倉保育所保護者会による約80枚の連凧



親子凧作り教室の様子

第25回いわき凧揚げ大会ファイナル



## 「ニューススポーツ等体験フェスティバル」

10月9日スポーツの日に総合体育館で、誰でも気軽に楽しめる「ニューススポーツ等体験フェスティバル」開催。

会場では、参加者の皆さんがスポーツチャンバラ、体力測定、ボッチャ、トランポリンなど、さまざまなスポーツを通して楽しみながら親交を深めました。



## 市中学校体育大会ボッチャ競技大会

10月13日に総合体育館で、全国では珍しい市中学校体育連盟主催の「ボッチャ競技大会」開催。

本大会には特別支援学級の生徒たちが参加し、日常の教室とは違う場所で競い合う姿は活気に溢れていました。また、観客席では楽しそうに声援を送っている様子が見られました。



## ふくしま再生可能エネルギー産業フェア

10月12日・13日にビッグパレットふくしま（郡山市）で「第12回ふくしま再生可能エネルギー産業フェア（主催・県、県産業振興センター）」開催。

本市からも約15の企業や団体が出展し、再生可能エネルギーや次世代エネルギーに関する自社の技術や製品、取り組みなどについて、来場者らに紹介しました。



## いわき大物産展

10月14日・15日に小名浜アクアマリンパークで「いわき大物産展」開催。

地元郷土料理のサンマのポーク焼きやほっき飯など海の幸のほか、親子都市の由利本荘市や兄弟都市の延岡市等によるご当地名物のPRなど、市内外から約50店舗が出展しました。4年ぶりに行われた「いわき技連・匠の技コーナー」では、ものづくり体験があり、子どもから大人まで楽しみました。



## 田人小学校 稲刈り体験

10月12日に田人町貝泊地区で、田人小学校の全学年約30名が稲刈り体験。

本紙6月号でお伝えした田植えから5カ月。自然の恵みをたくさん浴び、収穫を迎えた黄金色の稲。とても気持ちの良い秋晴れの中、子どもたちは、地域の方と一緒に笑顔いっぱい刈りました。

このお米は「希望の一粒」として、田人中学校や地域と連携しながら11月26日に田人支所で開催される「ほっこり祭」にて販売される予定です。



## 写真が語る「いわき」の歴史

### 中小炭鉱のために計画された病院

かつて、いわき地方の炭鉱坑内では落盤、ガス爆発、さらに坑内外を問わず各種機械の取り扱いに伴う事故などが多発しました。大規模の炭鉱は直営の病院や診療所を保有していましたが、中小炭鉱においては単独で治療施設を持つことが容易ではありませんでした。

昭和20（1945）年8月の戦争終結後、アメリカ軍は日本を間接統治して、民主化に向けて数々の指令を発し、その一つとして炭鉱と鉄鋼を中心とした産業復興がありました。石炭産業は優遇され、生産部門だけでなく石炭労働者の衣食住・厚生改善にも及びました。

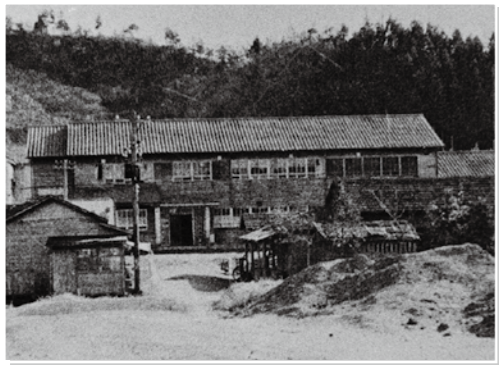
昭和23（1948）年「臨時石炭炭業管理法」の施行に伴い、中小炭鉱労働者ならびにその家族の福利厚生のため、産炭地に病院が建設されることになりました。

当初は平市が有望でしたが、内郷町が積極的に誘致。便利な国道に面しながら田んぼに囲まれた大字御殿に敷地を確保したため、ここに建設が決まりました。

しかし、建設に着手したものの、アメリカの指示によって法が失効したことから、政府は利用範囲を一般住民に拡げ、その運営を地域の市町村に担当

させることにしました。

病院運営には多額な費用がかかるため、内郷町だけでは運営できないことから、いわき地方の各市町村が費用を拠出することで運営することが決まり、昭和25（1950）年11月に開院にこぎつきました。この際、名称は市町村組合磐城共立病院と名付けられました。その後、昭和41（1966）年にいわき市が誕生したため、いわき市立総合磐城共立病院（現・いわき市医療センター）と改称し、現在は浜通りの拠点病院としての機能を果たしています。（いわき地域学会 小宅幸一）



市町村組合磐城共立病院  
【昭和29（1954）年「いわき市立総合磐城共立病院三十年の歩み」から引用】